

2019 「チーム石巻」活動報告

人間科学研究科教授 増田梨花

今年も昨年同様、11月1日(金)～3日(日)、「チーム石巻は【STAR を目指せ】をモットーに、被災地支援活動をおこなって参りました。

S 素直 sincere

T 本物を見て true

A さまざまな状況をうけとめ acceptance

R みんなでつながる relation

今年の活動としては、「絵本と音楽のコラボレーション ライブイベント」のプログラムを中心とした活動を石巻市内の2つの施設で行ない、また高齢者の住んでおられる公営住宅で、傾聴ボランティアの体験も新たに加わりました。

11月1日、18時頃私たちは石巻駅に到着。その後、石巻中央ライオンズクラブボランティアセンターに移動し、イベントの打ち合わせとリハーサルを行いました。今年も増田の友人で、ボランティア参加の声優、水谷ケイコ氏から発声練習を教わ

り、院生たちは熱心に発声法を学びました。声優の水谷ケイコ氏の感想を下記に記
します。

「昨年比べ、防潮堤ができていたり、道路が広がっていたり、ずいぶん復興が進んだように思いましたが、地元の方に伺うと、8年目にしてこの進み具合はまだまだ…と仰っていました。覆いの取れた「門脇小学校」、風化して朽ちてきつつある「大川小学校」…。年々、震災の甚大さを考えさせられます。

東日本大震災が起こり、何か貢献できることはないか?と思いながらも、何の術もなく、手をこまねいているところへ、友人の増田梨花先生から声を掛けて頂き、参加させてもらうようになり、はや7年目。ここの所、果たして石巻の皆さまに貢献できているのか、と疑問を抱くようになっていました。

今回、院生の皆さんは4人。そして院生OBの皆さん、増田先生、ロビン・ロイドさん。

この皆さんが一丸となり、「あ・うん」の呼吸で、心温かい「ワンチーム」だったことを感じました。毎年、訪問している障害者施設「みんなの夢広場」さん、「みんなの心が伝わっているな」と実感しました。

そして2軒目に訪れた「湊町公営住宅」。お休みの日にもかかわらず、大勢のお客様にお集り戴き、皆さん熱心に参加して下さいました。院生の皆さん、OBの方たちの「伝えよう」という気持ちがすばらしく、前日の発声練習も功を奏し、堂々としたものでした。

終演後、テーブルを囲んで「お茶とたい焼き」を食べながらのお話会は、思いがけず「震災後のお話」を聴くことができました。

約1週間、食べるものもなく、水もなかった事を一生懸命に話して下さいました。衝撃でした。

報道では知らされていない事がたくさんある事を知り、僅かな時間でしたが、生の声を伺うことができた貴重な時間でした。

改めて震災の恐ろしさを実感しました。

この他にも、「まねきショップ」のオーナーさん、「石巻ニューゼ」といい、阿部さん木村さんのお陰で、「生の声」をたくさん伺う事ができました。

今回は「伝える」ことの大切さを改めて大いに感じたと思います。

そしてたくさんの元気と勇気を頂きました。「湊町公営住宅」の皆さまとは、来年の再会まで約束してきました。迷うことなく、来年も参加させて頂きたいと思います。

どうぞよろしくお願い致します。」

確かにイベントを視聴して下さった来場者は、物語の世界に引き込まれていました。絵本と音楽（民族楽器やバイオリン[🎻]）が奏でるライブで、絵本の読み合わせや演奏を見聴きするという体験の視覚的刺激や聴覚的刺激、新奇性や非日常性、ライブ演奏への直接的な接触感が、復興地の人々の心と一体となり、そして、4人の修士課程の院生、ひとりの博士課程後期の院生、2人の修了生たちはそれぞれの思いを胸に刻みながら自分たちができる最大限の「行動」を体現してくれました。

民族楽器を担当して下さったロビン ロイドさんは以下の感想を寄せてくださいました。

From November 1-3 of this year, I was pleased and honored to be invited again to participate in Ritsumeikan University's volunteer support project for people living in Ishinomaki City and the surrounding areas. Working with the director, Prof. Masuda, is always a rewarding, educational, and inspiring experience.

Every year, of course, we are able to see how the cities and villages there in the Tohoku region are "re-building" in terms of construction and infrastructure. What is much less visible, however, is how those who lived through and survived that disaster nine years ago are regaining the will, strength, and cautious optimism for the future in their hearts and minds. This is where Ritsumeikan and Prof. Masuda's approach and work proves to be so successful.

Each year, we meet some of the same people that we have met before in the community. You can feel that they are so encouraged even by the simple

gesture of us having returned, as promised, to see them again. And every year we are able to make new friends both within our own project team and with local people.

Although there is no doubt that the picture book reading and music programs are very well received, what is clearly more significant and lasting is the fact that (while largely unspoken), those of us on both sides, while having to say our “goodbyes” at the end, will be keeping each other in our hearts and minds all through the year. There is a feeling that we will never be too far away and are ready at any time to meet, encourage, and help each other again in any way possible.

And as always, I do believe that everyone on this year’s project team will agree that we received far more than we were able to give… Thank-you.

Sincerely, Robbin Lloyd

イベントでバイオリンの演奏を担当してくれた大学院修士課程、修了生の内田一樹氏の感想を以下に記します。

2015年の大学院1回生だったときぶりに石巻市を訪れた。参加する前に前回の活動の際の写真や前回の感想などを久しぶりに読んで思い出していた。前回参加した際に「また石巻に行きたい」と思ったが翌年以降参加できずにいた。そのことがずっと心のどこかで引っかかっており、今回4年ぶりに参加してその引っかかりが少し解消された。

イベントでは、増田教授を中心に今回も絵本と音楽のコラボレーションが行われ、福祉施設の方々や公営住宅に住むおばあちゃんたちと交流することができた。公営住宅でのイベントで読まれた絵本『ラブユーフォーエバー』では、子守唄をバイオリンで演奏する場面があったのだが、おばあちゃんたちが演奏に合わせて優しく歌ってくださり、演奏しながら涙がこぼれてしまった。その後におばあちゃんたちと話をしていたら「息子は関東にいるんだけどね」「私は生まれてからずっと石巻よ」といった話も聞き、地震後住み慣れた街の公営住宅に残る決断をした方々の思いに少し触れられた気がした。最後まで手を振って見送ってくださったおばあちゃんたちの姿がいつまでも臉に焼き付いていた。

現地でのフィールドワークについては、いくつも心に残る光景があった。その中のいくつかを伝えたい。まず朝食前の散歩で見た光景で2つ印象に残った風景がある。1つ目は、沿岸部の道沿いの風景だ。4年前に歩いたときは何もなく大きな工場しかなかった海へ向かう道沿いに、いくつもの工場が立ち並び、朝6時にも関わらずその工場へ向かう車通りが多くあった。海のすぐ近くの大きな工場は震災後も比較的早く営業を再開したそうだ。海に近い場所に工場を作る理由は、輸送に適しているからだろう。津波の押し寄せたその場所で、高い煙突からモクモクと白煙を上げながら稼働する工場。そしてその工場へ向かう人々。この風景が何故か心に残った。2つ目は翌日に見た門脇町の風景。2日目の朝の散歩は後の予定もあり朝5時、日の出前に歩き出した。まだ薄暗い中、少しずつ町に明かりが灯っていく光景は、まるで映画のようで知らず知らずのうちに「カントリーロード」をロズさんでいた。そして、たどり着いた門脇小学校そばの高台から見た風景が忘れられない。そこにはかつて一つの町があった。人々が住んでいた。しかし、東日本大震災による津波、そしてその後の火災によって壊滅的なダメージを受け、現在は「がんばろう！石巻」の看板の一角を公園にするための工事が進んでいるため更地となっているところが多い。右手を見ると、新しい公営住宅がまだほの暗い景色の中、照明の明かりで浮かび上がっていた。そして左手を見ると被災した門脇小学校とその両脇で海を見下ろすように立っている多くの墓石群。まさに生と死が一つの風景の中で同居していた。そしてそのことがここにかけて一つの町が確かに存在したことを私に教えてくれているような気がした。そしてこの朝の2つの景色を通して私は「生きる」ということがどのようなことか、少し教えられたような気がした。

門脇小学校には、その後現地の阿部さんの案内でもう一度皆で訪れた。ここでは学校の避難が成功した。しかし震災遺構として残るのは3分の1だそうだ。地域の人の中には「すべて残してほしい」という声もある中で、もうじき3分の2の取り壊し作業が始まるそうだ。フィールドワークで訪れた際にも、車で来た方（おそらく現地の方だと思う）が、校舎の全景の写真を撮って去っていった。全てを見るからこそ伝わってくる震災の恐ろしさもあると思うが、こうして震災後の風景が少しずつ少しずつ変わっていくのだな、とも感じた。来年はもうこの姿は見られないのだろう。その後、大川小学校へ

と移動した。大川小学校は、地震後の津波によって当時学校にいた小学生 78 名中 74 名が亡くなった。『津波の霊たち 3・11 死と生の物語』（リチャード・ロイド・パリー著、2018 年）という大川小学校に関するルポがある。そこには生き残った遺族の方たちの状況や思いがつつられている。なぜこのようなことが起こったのか。そう思った一部の遺族の方たちが市や県を相手に裁判を起こした。そしてその裁判の結果、現場の教師たちの判断ミスが認められた。わずか 5 分ほどのところにある高台。小学生たちが普段シイタケ栽培で来ていたこの山を少し登れば、津波に巻き込まれずに済んだ。実際に歩いてみると、「どうして？」という思いがこみ上げてくる。教師の責任の重さ。それを教師となった今の私は感じずにはいられなかった。4 年前院生だった私はこの大川小学校の光景にただただ圧倒されてしまった。その光景は実際に生徒を前に教壇に立つようになってからもいつもどこか頭の片隅にあった。そして大川小学校をもう一度見て、改めて自らが教師としていざというときには目の前のこの子たちの命を預かっているのだという覚悟を実感した。

最後に今回 4 年ぶりに参加して、さらに多くのことを知りたいと思うようになった。そしてまた行きたいという思いも強くなった。4 年前から自分自身の立場やあり方も変わって、気付くこともまた変わった。4 年前は津波の高さに圧倒されたが、今回は津波によって大きく変わってしまった一つのコミュニティの在り方に大きく感情を揺さぶられた。今年のチーム石巻のモットーは「STAR(素直に、本物を見て、様々な状況を受け止め、みんなでつながる、Sincere True Acceptance Relation)を目指せ」だった。最初から最後まで多くの本物を見ることができたし、まだまだたくさん本物を見たいと思う。コーディネーターの阿部さんご夫妻や牡鹿の学校の木村さん、施設や公営住宅の方々、毎年変わらずに訪れる石巻焼きそばのお店の方、そして 2011 年から継続して参加されている増田教授やそのご友人の水谷さんなど様々な立場の人と出会って話を聞いて、触れ合うなかで、東日本大震災の周りにいた人たちとつながることができたように感じている。

帰ってきて火曜日に授業を行った。その授業の大半を費やして、石巻市に行って見た光景や聞いた話を生徒に伝えた。最後まで一生懸命ジッと写真や話に聞き入ってくれている生徒たちもいた。このように自分にできる事で石巻のことをこれからも生徒たちに伝えていくことができれば、と思っている。

大学院修士課程修了生で 4 回目の参加となった平井一成氏の感想を下記に記します。

今年も石巻チームの一員としてプロジェクトに参加させて頂き、本当に嬉しく思う。私はこれで 4 回目の参加となったが、今年度も、絵本と音楽のコラボレーションイベントとして絵本を読んだ。今年は初めて訪れる公営住宅でのイベントもあり、また新鮮な気持ちでイベントに臨むことができたように思う。

石巻を訪れる度、少しずつ風景が変わっていくのを感じる。風化していくもの、新しくできていくもの……去年あったものが見つからなかったり、新しいものができていて驚かされたり、目まぐるしい勢いで変化しているのを感じる。

毎年、フィールドワークでは「がんばろう石巻」の看板と大川小学校を訪れているが、今年はそのに加え、門脇小学校の校舎を間近で見ることができた。津波だけでなく火災によって激しく損傷した校舎がそのまま残っている。大きく立派な校舎だが、ガラスは割れ、所々変色している。震災前は時を告げていたであろう時計も、茶色く錆びた跡が残るのみである。ここも大川小学校同様、震災遺構として保存するという話になっている。ただし全体の保存ではなく一部のみを残すという。また、「がんばろう石巻」の看板がある地域は復興祈念公園として整備される事になっており、今も工事が続いている。昨年まで、看板近くには縁石の跡や、配線が露出している信号か街灯の跡を見ることができた。だが、今年はそのらを見つける事ができなかった。整備が進んでいるのを実感すると共に、どこか生々しさが失われてしまったような、そんな気持ちになった。公園として整備されている場所にはかつて町があり、人々が住んでいたという事実は過去の歴史になってしまう。歴史になってしまえば、生々しさは失われてしまう。風化させないという事と、保存のため手を加えるという事は、似ているようでどこか違うのではないか。私もどう違うのか、明確な答えはわからない。そして、そうしなければならないという事も理解はできる。だが、何かひっかかるものを感じる。

私は最初に、”目まぐるしい勢いで変化している”と書いた。これは復興が進んでいるというポジティブな意味も含むが、同時にネガティブな意味も含んでいる。復興祈念公園にしても、震災遺構を整備して残すという事にしても、それらはやり方によっては震災を歴史の一部に組み込んでしまうという事になってしまうのではないか。Googleで”門脇小学校”と調べると、”石巻市の史跡”という情報が返ってくる。史跡という言葉は、コトバンクによれば”歴史上重要な事件や施設などのあった場所”という意味らしい。たった8年前に発生した未曾有の大災害が、「歴史上」という言葉で表現されてしまう。確かに、それ以外のやり方や表現の方法が無いとわかっているけど、なんとなく哀しい気持ちになってしまうのは私だけだろうか。

記憶を語り継ぎ伝承していくこと、証人になる事はできるかもしれない。どこで何があったか、情報も多く残っている。だが、どこまでリアリティをもって伝えることができるだろうか。遠い歴史の1ページではなく、実際にあった事として、これからの世代に伝える事はできるだろうか。自分にとっては4年目の、震災から8年目の石巻に立って、そう感じた。

最後に、改めて現地で出会った方々と石巻プロジェクト参加者の方々、そして増田先生とコーディネーターの阿部さんに、心から感謝の意を表したい。私にとって、毎

年 11 月に訪れる石巻は大切な場所、大切な時間になっている。今後も可能な限り、続けて参加したいと思う。

また、大学院生、博士課程後期中野修氏の感想は、以下の通りです。

絵本と音楽のコラボレーションイベントで、チーム石巻で復興地をめぐる。実際の現場に足を運ぶことで感じる事、学んだことが多くあった。

たとえば、被災前の地域の様子の写真が飾られている場所があったが、私はそこでもショックを受けた。以前の写真と比べると、家が建っていた土地は空き地だらけになっており、大きく変化していた。この場を訪れ、災害のおそろしさをあらためて感じた。

工事に携わっている方たちも、東京オリンピックの準備などで復興地を離れ、そのため復興地での工事がストップしてしまっているところもあった。

大川小学校にも行くことが出来たが、そこでは学校防災の重要性を学んだ。当時の子どもたちの気持ちを考えると、非常につらかった。

イベントでは、絵本と音楽によって笑顔になっていく方たちを間近で観られたことでこちらにも喜びを頂き、元気をもらった。今回は絵本の読み合わせの間に、音楽と太極拳の時間があったが、利用者さんたちの反応にまた驚かされた。イベントを通して、絵本と音楽には人の心を動かす力があることを再確認できた。

震災当時、何かしなければいけない、でも何もできなかった自分。8年の時間を経て、今回、立命館大学の学生として石巻を訪れることができた。絵本と音楽を通して、わずかでも、復興地の皆さんへのお力になることが出来たのではないかと思う。このような機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。

さらにコーディネーターの阿部浩氏は、このフィールドワークやイベントを振り返り、以下のような感想を寄せてくださいました。

今年の 11 月に行われた石巻市での活動には増田教授を始め 10 名の皆さんに参加して頂きました。入念な事前準備と練習により素晴らしい成果を得ることが出来たと確信しています。災害公営住宅に暮らす人達との交流会ではしっかりとした傾聴で被災地の今とこれからの課題を見出し、大川小学校に於いては子ども達の命を守る学校防災を学ぶことが出来ました。自らの学びを現地で実践し、現地に来る事で初めて出来る【学び

あい】の場を通して沢山のことを得ることが出来たと思います。現地で関わった全ての人々に来年の再訪を約束し石巻を後にした立命館大学のメンバーに心より感謝いたします。

また、地元の大学生ふたりが「院生と交流したい」と積極的に連絡を取ってくれ、今回3回目、大学生三年生になった彼らとの交流を実現することができました。彼らは自らが被災し、今後、自分たちに復興地で何ができるかを模索し、真剣に考えていました。彼らの復興地への思いを院生たちも受け取り、彼らの質問に真摯に答えていました。

東北福祉大学の大学生の感想を下記に記します。

清水佑大氏：「先日はありがとうございました。院生方からお話を聞いて、実際の臨床現場でどのようなことが問題なのか、支援するにあたってどのような事が障壁となっているかを把握し、それらを研究する事で支援を創出していくのが研究者の務めだと学びました。自分の関心のある事だけではなく、社会や困っている人のためになるような研究が院生の研究には求められているのだと改めて感じました。自分はストレートで修士に進む予定なので、私は様々な論文や文献から問題を見つけその支援に関する研究をしていく予定なのですが、そのような情報だけではなく、実際に臨床に関わる方々からのお話を基に研究テーマを考えていきたいと思いました。」

及川拓氏：「4年目になる今年は、「実際に現場で働いていて、そこで必要だと思ったことを大学院で学ぶ」ということを具体的に聞くことが出来ました。大学では、実習やボランティアなどで現場にいることはあっても実際に働くことはないのも、やはり現場から大学院に入る方が学びたいことがハッキリしていると感じ、改めてストレートでの大学院と社会人大学院との違いを発見できた気がします。今年も交流会を開いていただきありがとうございました。」

復興という二文字に翻弄され続け、復興地という環境で暮らすストレスの多い中で課題を抱えた人々が「絵本と音楽のライブイベント」を視聴する体験を通して、MRO (Mutually responsive orientation)、即ち聴き手とイベントの行い手の双方向の応答性が絵本や音楽のリズムによって高くなるために、ポジティブな情動を共有することができ、年々継続して訪問することで「絆」を深めているのではないかと考える。今後も「絵本と音楽のコラボレーション ライブイベント」を通して、絵本や音楽の持つ力を活用しながら、院生達とともに復興地の人々、復興地で働く支援者をエンパワーし、今後も細く長くたくさんの人々との繋がり持ち続けていけたらと願っています。

最後に我らが兄貴でボスのコーディネーター、あべ兄ときむ兄に心から感謝の意を述べたいと思います。また常に阿部兄を陰で支え、私たちの力になってくださる阿部兄の奥様にも心から感謝の気持ちを伝えたいと思います。ありがとうございました。

東日本家族応援プロジェクト in 石巻 2019 に参加して

対人援助学領域 M1 小西恵巳

11月1日から11月3日まで、チーム石巻として増田梨花教授やサポートメンバーと共に宮城県石巻市を訪ねた。参加者は修士課程院生4名を含む総勢10名である。私たちは「S: Star 素直に、T: True ほんものをみて、A: Accept さまざまな状況を受け止め、R: Relation みんなで繋がる」をテーマに掲げ、石巻市内の2つの施設で「絵本と音楽のコラボレーションライブイベント」を行い、復興地としての石巻市や

女川町でのフィールドワークを体験した。現地では3日間を通して、石巻中央ライオンズクラブの阿部夫妻と一般社団法人おしかの學校校長の木村正氏から様々なお話を聞くことができた。

私自身、絵本と音楽のコラボレーションライブイベントは初めての体験であり、石巻を訪れるのも初めてであった。石巻チームとして東日本家族応援プロジェクトに参加して印象深かったことは、大きく2つある。一つ目は、初めての体験した「絵本と音楽のコラボレーションライブイベント」である。第1日目にリハーサルを行うまで、どのようなものか理解していなかったが、実際にロビン・ロイド氏の民族楽器の奏でる音楽とあわせて絵本を読み合わせると、スクリーンにうつる挿絵以上にイメージが広がっていきストーリーに躍動感が加わった。そして絵本の中の光景が目の前に広がってくる感覚を覚えた。絵本も民族楽器の演奏も、予備知識や予習もなしに楽しむことができるものである。絵本のストーリーがもともと持つメッセージに音楽が加わることで、大人も子供も楽しむことが可能になり、絵本の世界へ容易に入り込むことができるのではないだろうか。このような絵本と音楽のコラボレーションイベントは、しばし現実世界から解離して絵本の中の世界に身を置くことも可能にしてくれるし、逆に自分を絵本の中に投影させて外から自分自身を見つめることも可能であると思う。時や場所、絵本の選択によって様々な可能性があると感じられたことは大きな収穫であった。2つ目は、伝え続けることの大切さである。初めて訪れた復興地は、インフラ整備が進み、一見もとの暮らしを取り戻しつつあるように見えた。しかし、そこに暮らす人々の心の中から東日本大震災の記憶が消えることはないであろう。少しずつ希望を見つけながらなんとか前を向こうとする努力があるのだと思う。今回、お世話になったコーディネーターの阿部夫妻やおしかの學校校長の木村氏は毎年同じように、このプロジェクトのために多くの時間を割いて協力してくださっている。私たちは復興地の生の声を聞くことで、震災の恐ろしさを実感することができるのである。被災後しばらくは飲み水にさえ不自由し、トイレや女性の化粧などそれまで普通であったことができない状況が続いたことなど、マスコミの報道からうける印象と実際の状況はかなり異なっていた。自分たちができることは、月日とともにこの震災の記憶が風化しないように、復興地の方々との交流を通して実際に見て感じたことを伝えていくことだと思う。ここで大川伝承の会のパンフレットの中の文章を紹介する。

「失われた輝きを伝えるのは、時間が経つほどに難しくなりますが、とても大切なことでもあります。慰霊も検証も防災もそこが始まりです。伝え続けることで、思い出も命もき続けると思います。」¹⁾

最後に、毎年このような貴重な機会を与えてくださっている阿部夫妻や木村さん、ご指導いただいた増田先生はじめ石巻チームの皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 「大川小にお越しの皆様へ」大川伝承の会、小さな命の意味を考える会、2019.8

「東日本家族応援プロジェクト 石巻」に参加して

人間科学研究科 対人援助学領域 M1 田村 美子

今年のチーム石巻は、「STAR を目指せ」をテーマに掲げ、S 素直に (sincere)、T 本物を見て (true)、A さまざまな状況を受け止め (acceptance)、R みんなでつながる (relation)、という思いで活動を行った。初めて石巻を訪れ、多くの貴重な経験の中で、特に心に残ったことを伝えたい。

ひとつは、公営住宅を訪れ、集会所で「絵本と音楽のコラボレーション」のイベントを行ったことである。20 人の高齢の女性に参加していただき、最初に院生 4 人で、「手のひらを太陽に」を、音楽と振り付けで歌った。参加者全員が楽しそうに一緒に振り付け歌ってくださった。次に 1 人の院生が太極拳の先生となり、一緒に呼吸法を行った。絵本と音楽のコラボレーションでは、「バルバルさん」「森のどんぐりベリーオータ」の読み聞かせを行った。私はライオン役になりきって演技した。その後、「ラブユーフォーエバー」の絵本を、増田先生と水谷さんが読み、卒業生がバイオリンで子守唄を演奏された。皆さん一緒に子守唄を歌い、中には涙をぬぐう方もおられた。イベント終了後は、全員でお茶とたい焼きをいただきながら、お話をした。私がお話した女性は、被災後、仮設住宅に住んでおられたが、3 年前から公営住宅に入居できるようになったと話された。今は公営住宅に住む方々と助け合いながら、楽しく暮らしている様子を教えていただいた。過去を乗り越え、前向きに生きておられる思いを強く感じた。お話をした後、「とても楽しかった。」と話され、帰り際には皆さんから、「来年もまた来てください。」と言葉をかけていただき、握手をして別れた。チームで取り組んだイベントは、前日の練習以上の成果が出て、皆さんに楽しんでいただき、私たちの思いが伝わったことを実感した。数時間の関わりの中で、皆さんの温かい心に触れ、現地との深いつながりを感じた。

二つ目は最後のフィールドワークの大川小学校である。大川小学校では、津波で 74 名の児童と 10 名の教員が犠牲になり、裁判で遺族勝訴が確定した。私は、この裁判になった経緯や遺族の気持ちを、現地を訪れることで少しでも理解したいと思っていた。大川小学校に着き、茫然とした。周囲には何もない。校舎だけがぼつんと建っている。この地区も周囲の建物が全て津波で流されてしまった。校舎の時計は、15 時 37 分で止まっていた。すぐに裏山が見えた。と同時に、「なぜ。」と心の中で問いかけた後は言葉にならなかった。児童が椎茸栽培をしていた裏山に実際に登ると、地はコンクリートで、児童が歩いても 2、3 分で避難できる安全な場所だった。津波の到達位置が印されてい

たが、避難していれば津波の届かない場所だった。「これは人的な事故です。」と当時の状況を踏まえ、話を聞いた。私は、この一言に子どもたちの命の重みを感じた。遺族の思いが頭をよぎり胸が痛んだ。この現場で実際に見聞きした真実は、決して忘れず伝えていくことが大切だと実感した。

今回のプロジェクトで石巻を訪れ、多くの学びがあった。石巻から帰ってきてからも、3日間の光景が頭から離れず、心の整理をするのに時間がかかった。それほど、私の中でいろいろな思いが駆け巡り、深く心に刻まれた貴重な3日間だった。

最後に、プロジェクトでお世話になりましたチーム石巻の皆様へ、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

東日本復興支援プロジェクト 2019 年度石巻訪問レポート

M1 臨床領域 丁 桂霞

2019年11/1～11/3に東日本震災後支援10年プロジェクトの第9年目の参加者として私も増田先生の指導の下で「頑張ろう！石巻チーム」メンバーと一緒に石巻まで参りました。私は石巻チームを選んだ理由は9年前の地震発生時にテレビで悪魔のように人や家、走っている車を呑み込んだ津波の映像を見たからです。石巻は津波の被害が一番酷い場所として知られています。事前学習でも沢山の情報を調べ、心の準備をした上で石巻へ赴いたが実際に見た現地の風景、聞いた人々の震災についての語りは想像以上私の心を震撼させた。今回私たち大学院生は石巻での実習内容は二つで、施設への訪問とフィールドワークでした。

11月2日 絵本の読み聞かせイベント・震災時情報ステーションへの参観

「みんなの夢広場」という障害者施設と震災後に建てられた「湊公営住宅」に訪問し、増田先生より企画された大人への絵本の読み聞かせのイベントを利用者や住民に行いました。私たちM1の院生4人から用意した歌や呼吸体操の出し物もウォーミングアップタイムで行ないました。利用者の皆さんは私たちと一緒に唄ったり体を動かしたりしていました。色んな方に触れて、色んな状況を受け入れてみんなで有意義な時間を過ごすことができました。私たちの到来が利用者たちの生活に少しでも色彩を添えることが出来たら何よりも光栄なことです。絵本の読み聞かせでみんなが早い段階から役割分担を決め、前日から声優の先生の下で発声練習をし、現場で絵本の中の人物の気持ちになり、表情や身振りも入れて心を込めて読みました。聴者たちは物語のリズムに合わせて、一緒に唄ったり、涙を流したりされました。

湊公営住宅の高齢者女性たちからも「よく癒された！」との声も頂きました。湊公営

住宅でイベントの後に茶話会を行われていました。参加者から震災当時の状況や避難所での生活を聞きました。避難所では4日間くらいに飲む水が厳しく管理されて、薬を飲む必要のある持病者しか水をもらえなかったことが語られました。これは私たちがテレビの報道では聞いたことが無い話だなあと思いました。また石巻では湊公営住宅のように震災後、沢山の家を失った人々集まって新たな集団になりました。面識のない人々が一から共同自治会の運営で色んな困難や問題に遭遇していたことも聞きました。

Kさんのお話

施設訪問時にガイドをしてくださった K さんの話を伺えました。地震が発生した時に社長としての K さんは先ず社員たちを帰らせ、自分だけは家に帰れませんでした。家にいたのは両親、奥さん、大学生の子供2人でした。強い揺れの中、先ず大学生の子供2人に逃げさせて、奥さんが両親の手を繋いでいたが、途中から両親は手を放した。(両親は自ら逃げるのをあきらめたと木村さんは目が遠く見ながら淡々と語りました。)その後両親が無くなり、奥さんが辛うじて生き残りました。倒れた家に押し込まれ、津波の中に7時間漬けていた奥さんはその後救われました。お医者さんによるともう少し遅れたら両足が切断しないとだめなところでした。そして大量の真っ黒な津波を飲み込み、大面積の肺機能不全の後遺症を残っていました。それに PTSD になり、今でも治らない。全身のあちらこちらが痛い日々訴えています。

11月3日フィールドワーク

「がんばろう！石巻」の大看板の所在地に訪れました。

地震の直後に石巻市の南浜町の3丁目で経営していた家具屋若い店長が瓦礫だらけの現場から木の板を拾い、組み合わせて大きな看板を作りました。そして「がんばろう！石巻」と大きな字を書いて高く立てました。その後、この場所は石巻の情報収集地と復興のシンボルになり多くの人々の訪れる場所となりました。

ここの広場には津波最高6.9mの柱が立てて、実際に私たちはその下に立つと、津波の高さは一人の大人の身長は何倍になるか一目瞭然に見えました。

門脇小学校跡

震災後の遺跡として保護された2つの小学校の中の1つです。大川小学校と違うのはここの地勢が高くて津波の被害があまりなかったですが、しかし酷い火災の被害に当たりました。今でも溶けている窓ガラスが見えます。この学校のすぐ後ろに山があるので、当時在校生たちは即時に山への避難が出来たので、命の危険から救われました。

大川小学校跡

大川小学校が震災中に全児童の108人の内74人が、教職員10人が津波で犠牲になっ

たことがみんなに知られています。津波の警告が来たにもかかわらず、教職員が子供たちをグラウンドに集めて保護者を迎えに来るのを待機していました。地震が起こってから津波が来るまで50分があるのに11人の教職員の中に一人も即時に避難する判断を下ることができませんでした。すぐ学校の裏に歩いて5分に行ける山に登ったら助かったのに、その山に地震による倒木が一本もないのに、その山は普段学生たちが椎茸の栽培で登ったりしてよくなれている場所なのに、誰もその山に登ることを思いつかなかつた。津波が来る1分前にやっと逃げ出し、向かった方向は山ではなく、川でした。即ち津波の来る方向でした。住宅街の細い道で津波に遭遇しました。

今回は私たちが実際に大川小学校跡に来ました。地理状況、残ったボロボロな校舎、グラウンド及び裏山位置を確認しました。そしてグラウンドから裏山に登ってみました。とても近くて、本当に5分で山の上にあるコンクリートで作った高台に登れました。そこから校舎の全景及び学校の後ろの旧北上川の風景がはっきり見えました。

今でも宮城県内外から来た見学者が絶えません。人々は何故当時に教職員が山への避難を判断できなかったのかを不思議に思っています。また色々な推測が有ります。「津波がここまで来ると思わなかった」、「先生たちは遠くから赴任しに来た人ばかりで津波の知識が足りない」、「校長先生が不在だったので引率者がいない」等有りました。その上に私はこういう風に考えています。先頭に立って意見を出すと万が一失敗したら責任を負えないという考えが原因にもなるのではないのでしょうか、つまり集団的無知という現象に左右されたのではないかと考えます。もう一つは津波の知識を持っていない人にとって、地震だけ怖がっています。平坦な広場で待機したら地震からの被害が小さいだろうという考えです。地震発生時に山に石が転がったり、木が倒れたり危ない場所だと判断されるでしょう。結果的に見れば倒木はなかったが、地震が起こった当時に教職員たちが山は危険な場所だと考えていたのでしょうか。

最後に

「百聞は一見に如かず」という古い諺がありますが。9年前に起こった全世界が驚いた日本の大震災は今回、自分の目で見て確認できました。災害から人々が感動、教訓、悲しみ、苦しみ沢山のものを得ました。それら全部を受け止め、改めて再スタートして余った人生を尽くして人類に有意義なことをすることは大切です。今でも石巻の人々の元気で微笑んでいる姿が忘れられません。また私たちはそこで見たこと、感じたこと、得たことをどんどん周りの人々、そして次の世代に伝えることは私たちが果たすべき役目だと思います。

東日本家族応援プロジェクト（チーム石巻）に参加して

対人援助学領域 M1 山根佐智子

私が石巻のプロジェクトに参加したのは、増田先生の授業で久しぶりに絵本に触れ、子どもだけでなく、大人も楽しめる絵本の奥深さに興味を持ったことと、絵本の読み合わせが被災地の人々の心にどのように届くのか知りたいという気持ちからだった。「絵本と音楽」という組み合わせも親しみを持てた。しかしながら、今まで震災を経験したことがない私が、被災地を訪れて何ができるのだろう、現地の方が受け入れてくださるのだろうかという不安は出発当日まで消えなかった。

1日目の夜、顔合わせと院生の出し物の練習、絵本の読み合わせのリハーサルが行われた。増田先生のご友人で声優の水谷さんにご指導いただき、発声練習と絵本の読み合わせのリハーサルが始まった。絵本のセリフに合わせて民族音楽家のロビンさんが音楽を伴奏してくださった。民族楽器の心地よい柔らかな音色に包まれると、心が落ち着き、自然と声が出せるようになった。そして、不思議な一体感に包まれた。その時、明日、どのような場所で、どのような方と会うのか全く想像できなかったが、とにかく自分のできることを精一杯やろうと思えた。

2日目の午前、「みんなのゆめ広場」を訪問した。ゆめ広場は、身体や精神に障害を持つ方が生活する施設で、子どもから大人まで幅広い年代の方が、私たちを待っていてくださった。院生の出し物（歌「手のひらを太陽に」と太極拳）から始まり、絵本2冊の読み合わせと音楽のコラボレーション、ロビンさんの民族楽器の演奏、最後に「幸せなら手をたたこう」を皆さんと合唱し終わるまで、すべての場面で、会場の皆さんが一緒に参加して下さり、楽しんでくださった。初めは緊張したが、大学院の仲間、先生、水谷さん、ロビンさんがいる安心感、後ろから温かく見守ってくださる阿部さんと木村さんの姿に勇気を頂き、最後まで自分なりの精一杯を出すことができたと思う。「チーム」を実感した。

2つ目の訪問先は、湊町公園住宅という復興支援住宅の集会室で、20名ほどの高齢者を中心とした女性が集まってくださった。ここでも午前と同じように、温かく迎えていただき、積極的に参加してくださった。絵本の読み合わせでは笑ったり、涙を浮かべたり、ロビンさんの演奏で子守歌を口ずさんだりと、皆さんが盛り上げて、楽しんでくださった。終わったあと、茶話会があり、参加者の皆さんに震災の時のお話を聞くことができた。印象的だったのは、ある女性の「仮設（住宅）は良かった」という言葉だった。なぜ今の生活より仮設の方が良いのか理由を聞いてみると、「だって、みんな一緒だったもの」とその方は言った。仮設は、地域のみんなが同じ長屋に住むことができた。不便でも、皆が顔見知りで、声を掛け合い、助け合って生活していた。しかし復興住宅は、抽選で決まるため、地域の人がバラバラになってしまった。「寂しいよね」と静かに微

笑みながら言った。津波は長い時間をかけて育ててきた地域の人とのつながりも奪ってしまったのだと思った。

3日目のフィールドワークでは、「がんばろう石巻」門脇小学校「大川小学校」を案内していただいた。

「がんばろう石巻」の看板が立つこの地には、かつて2000戸ほどの住居があり、人々が暮らす町だった。津波は町も人々の暮らしも丸ごと飲み込んでしまった。震災当時、町の公園は、遺体安置場となり、たくさんの遺体がビニールに覆われて並べられたという。町の火葬場も流されたため使用できず、応急処置として、そのまま土に埋め、順番に掘り返して火葬したのだそうだ。

このあたり一帯は、今は危険区域に指定され、住宅を再建することができなくなり、慰霊公園にするための工事が行われている。私たちは「がんばろう石巻」の看板の前に立ち、集合写真を撮った。同じ場所に立ってはいても、現地の方と私たちは、見ている景色は全く違うのだらうと思った。

大川小学校については、プロジェクトに参加する前、一番時間をかけて調べた場所でもあり、写真も見ていた。しかし、実際この場に足を踏み入れた途端、何とも言いようのない不思議な感覚に襲われた。荒れ果てた校舎、雑草が伸び放題の校庭、変わり果てた野外ステージ、どれも津波が襲う前とは全く違っているのに、なぜか目の前に校庭で遊んでいる子どもの姿や、教室で学んでいる姿、笑顔で語り合う子どもの姿が見えるような気がした。子どもたちが避難することがなかった裏山にも上ってみた。幼稚園児でも十分に上れる坂道、数分歩けば、津波から逃れるのに十分な高さまで来ることができる。山の高台から学校全体を見下ろすことができた。校庭に目をやると、50分間、校庭で待たされ続けた子どもたちの姿が目に見えてきた。どんなに不安だったろう。どんなに怖かったろう。家族に会いたかったろう。残された家族の方は、どれだけ悔しかったろう。悲しかったろう。私も悔しさがこみあげてきたが、ご遺族の悲しみの深さは私には想像できないものだらうと思う。

【「証人」になるということ】

8年前、津波が町を飲み込む様子を日和山公園から見下ろす人々の映像が、繰り返しテレビから流れた。8年の歳月がたった今、自分の足で日和山公園に立ち、あの時と同じようにすぐ下に広がる景色を見下ろした。町が跡形もなく消え、今は茶色い土の更地になり、その先には灰色の防潮堤が続いている。この地を公園にするための工事をするクレーン車の黄色だけが鮮やかに見える。またいつの日か、この地を訪れる時には、一面緑であふれ、人々の笑顔の花が咲いていますように。

大川小学校を訪れた時、学校のと鼻の先にある裏山に登りさえすれば全員助かったのに…と悔しさがこみ上げた。そんな一瞬の判断の過ちが、大きな被害を生んでしまう

のが震災なのだろう。裏山の高台から校庭を見下ろすと、大川小学校の悲劇は人災だと思わずにはいられない。子どもの命を守ること。自分の命を守ることにについて、普段から考えておくことがいかに大事かを阿部さんは私たちに教えてくださった。自然災害のあちこちに、防げたかもしれない人災が起きている。

今回のプロジェクトに参加して、被災した方々の悲しみや苦しみに少しでも寄り添うことができれば…と思ったが、そんな自分の考えの愚かさを痛感するばかりだった。しかし、テレビやマスメディアの情報で分かったと思っていた今までとは、明らかに違う自分がここにいる。プロジェクトに参加する前、「証人になる」ことの意味をずっと考えていたが、答えは出なかった。実際に参加してみて、「証人になる」とは、自分の目で見たことを、自分の言葉と自分の感情で伝えることだと思った。私たちを温かく迎え入れてくださった現地の皆さんの優しい笑顔に隠された様々な思いは、どんなに精巧なレンズでも映し出すことはできない。そして、どんなに頑張っても、震災前の日々を取り戻すことはできない。「復興」とは誰のための言葉なのか…と改めて思う。

おわりに

3日間、朝早くから夜遅くまで、そして、帰りの列車に乗るまでお付き合いいただき、私たちの旅をコーディネートしてくださった阿部さんご夫妻、木村さん、本当にありがとうございます。こんなにも人の心の温かさ、人とのつながりを感じた経験はありませんでした。心より感謝いたします。そして、プロジェクトの準備段階から自宅に無事到着するまでの長きにわたり、私たちに寄り添い、貴重な経験と充実した時間を与えてくださった増田梨花先生、本当にありがとうございました。



